

西洋文明の源流としての旧約聖書 —生きるための知恵を学ぶ—

日時：2022年7月13日(水) 16:30~18:30

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペース

旧約聖書は西洋文明の源流であり、その大いなる知見は現在の西洋文明を決定づけています。この書について皆さんに語ります。

旧約聖書はイスラエルの民が長い歴史を経て編んだ古代文書です。その豊かな思想の世界を一度の講義で紹介するのはとても無理ですので、旧約の知恵文学に焦点を当てます。

この知恵文学とは箴言、ヨブ記、コヘレト書に代表されます。古代イスラエルの知恵や叡智はこれらの書を土台にしています。これらを読むと、イスラエルの民がどう生き、どう生きて来たかが見えて来ます。またそこから、特徴的な楕円の思考が浮き彫りにされます。

この楕円の思考が旧約宗教の本質をうまく説明します。この旧約の知恵の思考から、現代への射程を考えます。

講師：小友 聡
東京神学大学教授

司会：小菅 隼人
慶應義塾大学教養研究センター所長・理工学部教授

2022年度 慶應義塾大学
教養研究センター主催
基盤研究 教養研究講演会 no.6

西洋文明の源流としての旧約聖書 — 生きるための知恵を学ぶ —

旧約聖書は西洋文明の源流であり、その知見は現在の西洋文明を決定づけています。この書について皆さんに語ります。
旧約聖書はイスラエルの民が長い歴史を経て編んだ古代文書です。その豊かな思想の世界を一度の講義で紹介するのはとても無理ですので、旧約の知恵文学に焦点を当てます。
この知恵文学とは箴言、ヨブ記、コヘレト書に代表されます。古代イスラエルの知恵や叡智はこれらの書を土台にしています。これらを読むと、イスラエルの民がどう生き、どう生きて来たかが見えて来ます。またそこから、特徴的な楕円の思考が浮き彫りにされます。
この楕円の思考が旧約宗教の本質をうまく説明します。この旧約の知恵の思考から、現代への射程を考えます。

7月13日(水) 16:30~18:30
場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階
シンポジウムスペース
対象：研究生、学生、教職員、職員
★入場無料・予約不要★

小友 聡 (おともぞとし) (東京神学大学教授)
1956年、青森県生まれ
専門領域 旧約聖書学、キリスト教学、倫理学
1980年：東北大学文学部哲学科卒業
1986年：東京神学大学大学院修士課程修了
1988年：東京神学大学大学院修士課程修了
1999年：ドイツ・ベール神学大学博士号取得
2007年：東京神学大学教授
現在、日本基督教団中村町教会牧師兼任

著書
『コヘレトの言葉』を讀もう (日本キリスト教団出版局)、『VTJ旧約聖書注解 コヘレト書』(同)、『それでも生きる』(NHK出版)、『謎解きの知恵文学』(ヨベル)、『すべてには時がある (若松英輔との対談)』(NHK出版)、『旧約聖書と教会』(教文館)、『絶望に寄りそう聖書の言葉』(ちくま新書)など。

お問い合わせ toiwase-lib@adst.keio.ac.jp

講師略歴

小友 聡 (東京神学大学教授)

1956年、青森県生まれ

専門領域 旧約聖書学、キリスト教学、倫理学

1980年：東北大学文学部哲学科卒業

1986年：東京神学大学大学院修士課程修了

1999年：ドイツ・ベール神学大学博士号取得

2007年：東京神学大学教授

現在、日本基督教団中村町教会牧師兼任

著書

『コヘレトの言葉』を讀もう (日本キリスト教団出版局)、『VTJ旧約聖書注解 コヘレト書』(同)、『それでも生きる』(NHK出版)、『謎解きの知恵文学』(ヨベル)、『すべてには時がある (若松英輔との対談)』(NHK出版)、『旧約聖書と教会』(教文館)、『絶望に寄りそう聖書の言葉』(ちくま新書)など。

西洋文明の源流としての旧約聖書

—生きるための知恵を学ぶ—

東京神学大学 小友 聡

小菅 (司会) 皆さん、こんにちは。時間になりましたので「教養研究センター基盤研究 研究講演会」を始めます。この研究講演会も、コロナ禍で2年ぶりの開催ということになりました。

教養研究センターの基盤研究講演会とは、教養研究センターの使命である、「教養とは何か」「教養とは何のために必要か」ということを各界の方々の講演を通して議論をしながら深めていこうという研究会です。ですから、私どもこの研究会は、たくさん人を集めるということを目的しておりません。むしろここにいらした方々に、ぜひいろいろ意見を伺いながら、議論をして、今日のテーマを深めていこうと思います。

今回お願いしたのは、日本を代表する旧約聖書の研究者である、小友聡先生です。

さて、慶應義塾を含めて、日本の知識人、大学生というふうに呼ばれている人は、宗教に対して意識が低過ぎるといいますか、宗教を知らな過ぎるということがあるのではないかと私は思うのです。これはキリスト教、仏教、イスラム教、そういうものに対してイメージだけを持っていて、一体それがどういうものなのか、どのように学んだらいいのかということをよく分かっていない。しかし、恐らくはそういう宗教でもって、世界は動いている面が非常に強いのだらうと思います。そうであれば、教養と宗教を切り離しては考えられないはずです。本日、小友聡先生にお願いしたのは、そのような意図からであります。

小友先生をご紹介したいと思います。小友聡先生は、現在、東京神学大学教授で、1956年青森県のお生まれです。専門領域としては、旧約聖書学、キリスト教学、倫理学。東北大学を出られ、東京神学大学の大学院を出た後、ドイツ・パーテル神学大学で博士号を取得されました。現在、東京神学大学教授で、日本基督教団中村町教会の兼任牧師であります。多数の著書がありますが、皆様のお手元にあるチラシ、あるいはポスターで、『コヘレトの言葉』を読もう』あるいは『謎解きの知恵文学』、『すべてには時がある』などが比較的手に入りやすいと思います。また、去年、NHKで放映された『こころの時代』でコヘレトの言葉についてお話いただきました。きっと御覧になった方もいらっしゃるのではないかと思います。

本日、小友先生には、1時間ほどお話をいただきまして、それからかなり長く、1時間ぐらい皆さまと議論をしたいと思っております。ですから、皆さまどうぞ、小友先生への質問、あるいはご意見などを考えながらお話を聞いていただければと思います。

申し遅れましたが、私はこの教養研究センターの所長をしております、小菅隼人と申します。本日の司会を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

本日の講演は記録されて、教養研究センターのホームページにアップロードされます。2年分を合本して冊子にしたいと思っております。

それでは、先生よろしくお願いいたします。

1. はじめに

小友 皆さん、こんにちは。小友聡です。「小友 (おとも)」という珍しい苗字で、青森県の生まれです。

本日はこの慶應義塾大学の講演会にお招きをいただきまして、大変光栄に思っています。小菅先生に依頼を受けましたとき、私でいいのかなという気がしたのですが、喜んで本日は講演をさせていただきます。

「教養」という大きな主題、聖書についてお話をいたします。私は旧約聖書学を専攻にしておりますので、その領域で皆さんに聖書の話をしたいと思っております。なるべく分かりやすい言葉を使ったのですが、私が分かりやすいと考えていることが、皆さんにとって本当に分かりやすいかどうかは分かりません。原稿を作りましたので、これを見ながら私の話を聞いていただきたいと思います。

「西洋文明の(源泉)源流としての旧約聖書」というタイトルでお話をいたします。

具体的には「旧約聖書の知恵文学」の「知恵」これはヘブライ語で「ホクマー」と言いますが、このことについてお話をします。旧約の知恵とは一体どういうものかということ、皆さんに知っていただきたいと思っております。それが、西洋文明の源泉としての旧約聖書を理解する手掛かりになると私は考えております。

旧約聖書の知恵といいますが、いきなり論じても皆さんの関心事には接合しないと思っておりますので、まず、聖書と

は何か、旧約聖書とは何かということについて言わねばなりません。

聖書と言いますと、皆さんは恐らく「神は愛である」こういう美しい旧約聖書の言葉、崇高なこの宗教的な言葉をまずイメージするでしょう。しかし、残念ながら、聖書は日本では一般にはなじみのない書だと思えます。ふだん、皆さんも聖書との接点はあまりないでしょう。そこで、聖書について簡単に述べておきます。

1) 聖書とは何か

聖書とは古典文学ではありますが、ユダヤ教とキリスト教にとっては、これは正典なのです。「正典」と書きましたが、「聖典」でも構いません。キリスト教は旧約聖書と新約聖書を聖書としますが、ユダヤ教は新約聖書を信じませんから、旧約聖書だけを聖書とします。旧約聖書という呼び方はキリスト教の呼び方なのです。

旧約聖書と新約聖書はどういう関係かと言いますと、旧約聖書を基にして記されたのが新約聖書です。ですから、新約聖書によく旧約聖書の引用や解釈が出てきます。キリスト教会は旧約聖書をイエス・キリストの預言として解釈して、イエス・キリストを旧約聖書の預言の成就だと信じます。そのように旧約聖書を解釈して、新約聖書が記されたのです。

新約聖書には、イエス・キリストの生涯について書き記す福音書、それから最初期の教会の歴史を記す使徒言行録があります。さらに、パウロやヨハネなどが書き記しました多くの書簡、そして最後にヨハネの黙示録、これらが新約聖書に含まれます。

旧約聖書はどういう書かと言いますと、イスラエルの民の歴史を記した書です。イスラエル民族の興亡を証言しています。果てしない年月を経て書き記されました。キリスト教の数え方でいうと39巻から成りますが、この旧約聖書を書き記したのは、祭司、また預言者、知者など、多種多様な人々です。イスラエルの民がどのようにして成り立ち、どのような歴史を経て、最終的にどのような状況になっているか、それらがすべて旧約聖書には書き記されています。

これから申し上げますけれども、一言で言うと、旧約聖書には絶望を生き抜いた人々の言葉が織り込まれています。それが私たちの現実に不思議にリンクする。今、ウクライナ戦争でゼレンスキー大統領が不屈の指導者として指揮を執っていますが、ユダヤ系であるという彼のこの出自は、絶望を生き抜いたイスラエルの民の叡智を継承してい

ると言えるかもしれません。

2) 旧約聖書の歴史

旧約聖書を書き記したイスラエル民族の歴史についてお話をします。絶望を生き抜いた歴史だと言うことができると思います。

もともとイスラエルの民は、エジプトで虐げられていた下層の人々が起源だと言われます。単一民族であったということではないのです。種々雑多な人々が虐げを逃れて、エジプトを脱走した。エジプトを脱出したこの出来事が、イスラエル民族の起源だと言えます。どの民よりも、どの民族よりも弱く、また、神の助けを必要とした人々が、神によって選ばれ、神の民になったと書かれています。

モーセという指導者がその起源に関わります。イスラエルは約束のカナンの地に居住をし、やがて王国を形成します。紀元前10世紀、ダビデ、ソロモンの時代。しかし、この王国はやがて南と北に分裂し、それぞれの歴史を経ていきます。紀元前8世紀には、北王国が滅亡する。生き残った南王国も、紀元前6世紀には滅亡してしまいます。神に選ばれたイスラエルの民が、国を、国家を失ってしまう。これが破局の出来事であったのです。南王国が滅亡した紀元前6世紀、紀元前587年ですけれども、エルサレムは破壊し尽くされ、多くの人々が剣に倒れた。魂のよりどころであった神殿は消失。王国は消滅。イスラエル民族は世界史から消えていった。

辛うじて生き残った人々は捕らえられて、バビロニアに強制連行されるのです。その数、数千人、あるいは1万人と言われてはいますが、これが、バビロン捕囚と呼ばれます。イスラエル民族は持てるものを全て失ってしまった。絶望とはこのことです。ですから、バビロン捕囚は全てが失われたということであった。

けれども、この絶望は終わりではなかったのです。この出来事は新たな始まりであった。絶望の経験が新たな始まりになるのです。

捕囚の民は、自分たちの歴史を振り返りました。そして、歴史の編纂を開始します。なぜ神の民は、我々は滅んだのか。神は自分たちのために何を計画しておられるのか。神に立ち帰るためにどうしたらよいか。徹底的に考え抜いて、復興への希望を見いだすのです。旧約聖書の最初の書である創世記。天地創造の記述から始まる、あの創世記第1章で神が天地創造の初めに「光あれ」と言われた。すると「光があった」。ここから旧約聖書は始まるのです。神の最初の言葉は「光あれ」です。まさに絶望の時

代、捕囚の時代に、この捕囚の民が絶望から希望を見いだしたことを証言しているわけです。

紀元前6世紀後半、イスラエル民族は捕囚という絶望を生き抜き、やがて奇跡的な救済を経験します。イスラエルを捕囚したバビロニアが滅亡する。ペルシアがオリエント世界の覇者になりました。捕囚民はペルシア王の勅令によって解放されました。驚くべきことです。この捕囚からの帰還民が中心になって、やがて神殿が再建され、ペルシア帝国の支配の下、イスラエルはユダヤ教団という宗教団体として復興を遂げるのです。

ペルシアの支配権はその後、ギリシアに変わり、さらにローマ支配の時代に移っていきます。オリエント世界の覇者たちの興亡の中で、ユダヤ教団は神殿と律法、この二つを二本柱として存続しました。

旧約聖書の中で最後に書き記されたのはダニエル書と言われますが、この書は紀元前2世紀半ばに記されました。ですから、旧約聖書はほとんど1,000年にわたる長い年月を経て編纂され出来上がったということです。

しかし、紀元70年のユダヤ戦争で、ユダヤ教団はまたしても悲惨な破局を経験します。エルサレムは再び破壊され、神殿が消失する。ローマによって都が陥落するので。生き残った人々によってユダヤ教は聖書のみで生きる決断を余儀なくされました。この紀元1世紀後半のユダヤ教の破局経験と、そしてキリスト教の勃興がオーバーラップしているのです。

ナザレのイエスが現れたのは紀元前後です。紀元30年頃にイエスは地上の生涯を終えて、その後、弟子たちによって初期キリスト教が生まれました。パウロによる地中海世界への宣教は紀元50年代のことです。キリスト教は紀元1世紀のユダヤ教から生み出され、そしてこのキリスト教は旧約聖書を聖書とし、やがて新約聖書の時代が始まります。

旧約聖書ではイスラエルが神の民でしたけれども、新約聖書ではキリストを信じる教会が新しいイスラエルとして解釈されます。新約聖書の成立過程は、ユダヤ教の聖書の正典化とまた関係している。いずれにしましても、聖書成立の背景には破局の時代を生き抜いた人々、イスラエルの民のリアルな現実があるのです。

2. 旧約聖書の中心としての契約

次に、旧約聖書の中心としての契約について、皆さんにどうしても説明しなければなりません。旧約聖書を理解す

るために何よりも重要なポイント、これが契約です。皆さんは意外だと思うかもしれませんが、契約が旧約を理解するための最も重要なポイントなのです。イスラエルの民は契約共同体です。イスラエル民族、イスラエルの民は契約共同体。このことが旧約聖書において決定的に重要なのです。

1) 契約ということ

契約とは、社会的・法的行為です。これは西洋の、ヨーロッパの社会基盤となっているシステムです。もともとは旧約聖書に起源があります。ヘブライ語で「ベリート」と言いますが、旧約聖書においては、イスラエルが神の民として神と契約を結んだこと、そこにイスラエルの起源があります。神がイスラエル民族を選んだ。エジプトからこの民を救い出したわけです。この神の選びは一方的です。申命記によれば、イスラエルがどの民よりも貧弱だから、神はイスラエル民族を選び、この民をエジプトから導き出した。そのイスラエルと神との間で結ばれた約束がシナイ山での契約であって、モーセがイスラエルの代表として神と契約を締結するのです。

このシナイ契約は、モーセ五書（律法）の中心に位置づけられます。モーセ五書は旧約全体の中心に位置しますから、シナイ契約が旧約聖書全体の中心になる。ちなみに、このシナイ契約の中心には十戒があります。十の戒め。神が石の板にこの十戒を刻んだ、それがモーセに授与されます。この十戒がシナイ契約の中心にあります。

契約がイスラエルにとって決定的となりました。神はイスラエルに祝福を約束します。その祝福を受けるために、イスラエルは律法に従うと誓う。これが契約です。イスラエルの民は律法、とりわけ律法の象徴として十戒を守る。そういうわけで、イスラエルは本質的に契約共同体です。契約はイスラエルのアイデンティティに関わります。神との契約なしでイスラエルは存立し得ないのです。

2) 旧約と新約

そこで旧約、新約ということが改めて理解されます。キリスト教では旧約聖書と新約聖書という呼び方をしますが、この旧約聖書の「約」そして新約聖書の「約」は約束の「約」です。契約を意味します。旧約聖書は古い（ふるい）契約の書、新約聖書は新しい契約の書ということです。

旧約聖書では、神との契約を結んだのはイスラエルの民です。それに対して、キリストを信じる教会が新しいイスラエルになった。そこでキリスト教は、旧約聖書に新約聖

書を加えて聖書とするわけです。このように、契約認識がユダヤ教からキリスト教に継承されている。新約聖書において、旧約聖書の契約は成就したのだとキリスト教は信じているのです。

3) 宗教性と世俗性はつながる

旧約聖書を理解するために、契約ということが決定的に重要だということを申し上げました。この契約が、旧約聖書の思想の枠組み、根幹を説明してくれるのです。それは言い換えますと、宗教性と世俗性がつながるということです。宗教性と世俗性、この言葉が適切かどうか、宗教性と自律性と言ってもいいかもしれません。相反するこの在り方、宗教性と世俗性が契約においてつながるのです。

ユダヤ教においてもキリスト教においても、旧約聖書は宗教性を保持していますが、旧約聖書それ自体は実に人間的な、世俗的な内容を持ち、泥臭い書です。これから扱います知恵文学の箴言、ヨブ記、コヘレトの言葉もそうです。極めて現世的な、世俗的な内容の書なのですけれども、そこに宗教性があるのです。

この宗教性と世俗性、言い換えますと、神を信じるという信仰の次元と、この現世を生きるという次元。これは「神頼み」と「自己責任」と言ってもいいでしょうか。この「神頼み」という宗教性と「自己責任」という世俗性がつながるのです。神学的に言えば、垂直の次元と水平の次元。この両者がつながる。これが旧約聖書の基盤である契約にはっきり見られる。

どういうことかといいますと、シナイ契約では神がイスラエルの民を招いて天から律法を授与する。律法は神から啓示された書です。この天から与えられた書にはまさしく宗教性が表れています。それにイスラエルの民は応答し、律法を守ると誓う。この律法の内容は十戒に見られるように、宗教性と世俗性が結合しています。

十戒というのは、偶像を拜むな、偶像を作るな、主の名をみだりに唱えるな、安息日を守れ、こういう宗教的な神信仰の定めと、そして隣人愛の定めがある。つまり父母を敬え、殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、むさぼるなという隣人への倫理、愛の行為。この両方が結合しています。神を愛しなさいという命令と、隣人を愛しなさいという命令が結びついている。これが十戒です。

言い換えると、宗教性と倫理性、宗教性と世俗性が結びついて切り離せない。こういう仕方、契約は宗教的であり、同時にまた世俗的なのです。契約に宗教性と世俗性が結合していることをまず指摘いたします。

3. 旧約聖書の知恵文学

さてここから私が本日、特に注目したい知恵文学の話に入らせていただきます。本日は旧約聖書の知恵文学に焦点を当てます。旧約聖書の本質を知るために、この知恵文学が実に面白いと思うからです。

旧約聖書には律法、それから預言者、そしてまた詩文学などの諸書があります。詩文学は知恵文学と呼ばれます三つの諸文書から成っています。それが箴言、ヨブ記、そしてコヘレトの言葉です。この三つの書いづれも、イスラエルの知恵について、知恵（ホクマー）について教えてくれる文学的な文書群です。

この三つの知恵文学において重要な要素は、もちろんこの知恵（ホクマー）ですけれども、定式化すると一つの表現にまとまります。それは「神を畏れることは知恵の初め」という言葉です。これは箴言で大変有名な言葉です。「神を畏れることは知恵の初め」。この箴言の格言、これは実はヨブ記にも、またコヘレトの言葉にも共通してあります。知恵文学の中心主題なのです。

「神を畏れる」は要するに、神を信じるということ。これが「知恵の初め」つまり人間の営みである知恵／叡智の始まりなのです。言い換えると、人間の知恵の限界で神を知り、神の支配を信じるということ。ここでも、契約に見られた宗教性と世俗性がつながっている。知恵文学でも、畏れ（信仰）と知恵（叡智）が、対立項だけでもつながるのです。

1) 箴言^{しんげん}

このことを具体的に見ておきます。まず、「箴言」にこれがあります。箴言という知恵文学はイスラエルの格言を広く集めた格言集です。その格言は多種多様です。イスラエル社会でどう生きるか、どう生きるべきか、極めて世俗的な処世術を語りますが、知恵は栄達と繁栄をもたらしてくれる。勤勉が説かれます。例えば面白いことですが、アリとキリギリスの話がイソップ物語にあります。そのアリとキリギリスとそっくりな格言もあります。極めて世俗的な処世術、格言集です。

この箴言の中に、宗教性がにじみ出てくるのです。例えば、こういう格言があります。

二つ紹介します。「心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼るな。どのような道を歩むときにも主を知れ。主はあなたの道をまっすぐにしてくださる」。それから「人は戦いの日のために馬を備える。しかし、勝利は主による」。

いずれも箴言の中に出てくる格言です。箴言では、生き抜くために知恵や努力が必要ですが、それだけではなく、神に頼るという宗教性が要求される。自分の分別に頼るなど言うわけです。一方で、その知恵を教え、どう生きるか処世術を教えながら、しかし自分の知恵に頼るなどという言い方がされるのです。

二つ目の格言では、戦争で勝利するには敵に優る多くの武器を必要とします。最終的に戦いに勝つかどうか、それは神が決めることだと。つまり武器の数量でもって判断しても、勝利は決定しない。言い換ええますと、どんな人間の知恵、叡智にも限界がある。その限界において神の支配が知らされるのだという内容です。まさに「神を畏れることは知恵の初め」ということです。箴言の格言では宗教性と世俗性が結合している。これが指摘できます。

次のヨブ記も同じことが言えるのです。

2) ヨブ記

ヨブ記という知恵文学は、哲学的で難解な書だという印象があります。けれども、この書でも箴言と同じように、知恵の限界性と神の存在の認知、神の支配の認知が結合する。

ヨブは義人です。神の前にパーフェクトな義人として紹介されます。けれども彼は耐え難い災いに遭って、全てのもを失った。神に訴え、なぜ自分にこのような災いが下るのか、理由を求めます。しかし神は答えません。最後にようやく神が答えてくれます。ヨブはその神の発言を理解できないのです。にもかかわらず、ヨブは神の前に崩れて、己を翻す。こういう物語がヨブ記です。どう理解すべきか解釈が難しい文書ですが、このヨブ記において、人間の知恵の限界と神の知恵とが語られます。

ヨブ記の謎を解く一つの鍵になるこういう言葉があります。「では、知恵はどこから来るのか。分別はどこにあるのか。それは生ける者すべての目に隠され、空の鳥にも隠されている。(中略)神は知恵を見て、これについて語り、これを確かめ、探し出した。そして、人に言われた。『主を畏れること、これが知恵である。悪を離れること、これが分別である』」

謎めいた言葉ですが、ここに人間の知恵の限界が語られます。人間は神の計画を知り得ないと書かれています。神の計画を受け入れ、自ら最善を尽くして生きるほかないのだ。この知恵の考え方がヨブ記全体の意図を示します。

ヨブ記において、ヨブは最後に神に問うことをやめる。自ら神に答える生き方に方向転換します。ここに面白さが

ある。ヨブ記の謎が解けてくるように思います。つまり人は人生の不条理を神に問うのではなくて、むしろ神から問われているのです。「問いのコペルニクス的転換」と説明できます。ヨブ記でも人間の知恵の限界性、そしてそこに神の支配が確認されるということになる。つまりヨブ記においても、宗教性と世俗性、宗教性と自己責任がつながっているのです。謎めいた書ですが、ここにヨブ記の謎解きができる。

3) コヘレトの言葉

コヘレトの言葉も、同じことが言えます。これは「空しい」「空しい」「空の空」「いっさいは空である」と繰り返す書です。ひねくれ者が書いた支離滅裂な書と言われます。キリスト教会では、この書は異端的だとされます。

しかし、この書も知恵文学の本質を示しています。コヘレトは死を直視します。死の近さから目を離しません。そういう意味で暗さがあります。絶望的な書だと言えるかもしれない。例えば「今なお生きている人たちよりも、すでに死んだ人たちは私はたたえる。いや、その両者よりも幸せなのは、まだ生まれていないひとたちである」。このような言葉を読むと、自死願望のように受け取れますよね。絶望的なことを記してある書のように見えます。しかし、この書に極めて宗教的な言葉が出てくるのです。

二つほど抜き書きしました。このような言葉があるので。

「神はすべてを時に適って麗しく造り、永遠を人の心にと与えた。だが、神の行った業を人は初めから終わりまで見極めることはできない」。

「私は知った。神が行うことはすべてとこしえに変わることがなく、加えることも除くこともできない。こうして、神は、人が神を畏れるようにされた」。

味わい深い言葉です。コヘレトは死という終末、終わりを直視して、そこから反転する。生きていることこそが神の賜物なのだとは反転し、生を喜ぶ主張をするのです。人生は死があるから意味がある。逆説的な論理でコヘレトは記しています。人生は終わりがあから人生だ。終わりがなければ人生はもう人生ではないという見方です。

コヘレトが繰り返す「空しさ」とは、死までの時間の短さを言います。ですから、死から逆算された残りの時間が我々にとって生の時間。そしてそれは、今、自分は生かされている、今のこの時が神の賜物、恵みなのだとコヘレトは教えているのです。これはまさしくメメント・モリ（死を覚えよ）という中世の思想につながるものです。絶望的

限界状況においてどう生きるかを考える思考です。このコヘレトの言葉、コヘレトの知恵においても、人間の知恵の限界と神支配の認識が結合しています。死という限界状況において世俗性と宗教性がつながっている。すべて同じなのです。箴言も、ヨブ記も、コヘレトも。

4) 知恵文学における信仰と叡智

この三つの知恵文学において、宗教性と世俗性がつながっていることを指摘しました。人間の知恵には限界があつて、その限界において神の支配を認識し得るのだという思考。「神を畏れることは知恵の初め」という格言に集約されるのです。そしてこのことは契約ともつながります。神を信じる信仰と人間の叡智が接続をするからです。

このことについて重要なことは、人間の知恵／叡智は徹底した営みだということです。これは言うまでもありません。人間はありとあらゆることを考え、知恵を尽くす。その意味で、知恵はまさしく「学問」、Wissenschaft と言い換えていいわけです。しかし、その人間の知恵／叡智の到達点において限界がある。その限界において神の支配が認識されるのです。これがユダヤ的知性だと言ってよいと思います。キリスト教もこれを継承しています。

知恵文学の書、特に箴言がそうです。この書はイスラエルの教育的な教科書でありました。イスラエルは神との契約が基盤にあると説明しました。知恵文学は、神との契約において人はどう生きるかを徹底して考え抜く、また教えているわけです。そこにおいて、宗教性と世俗性は結びついているのです。

4. 旧約聖書の楕円的思考

ここから「旧約聖書の楕円形的思考」ということを一緒に考えていきたいと思つています。私がこれまで話したことの言い換えになりますけれども、知恵文学を例にして旧約聖書の宗教性と世俗性の結びつきを述べました。しかし、宗教性と世俗性は本来、区別されるべきものです。少なくとも現代の我々にとってはそうです。宗教的な事柄と現世的な事柄が融合しますと社会は混乱を引き起こします。收拾がつかなくなる。

例えば、金銭の取引において「神が返済を約束してくれる」という宗教性が入り込んでしまうと取引は成立しません。そういう意味で、知恵文学における宗教性と世俗性の結びつきは現代においてはアナクロニズムに過ぎないと言わねばならないかもしれない。問題はありそうです。しか

し大事なことは、宗教性と世俗性の融合ではなくて、接続なのです。

こういう知恵文学の思考は旧約聖書全体で一貫しているものです。これを私は「楕円的思考」と説明します。これが最もふさわしいのではないかと思うのです。

楕円は中心（焦点）が一つではなくて二つです。しかも、二つの中心の間に絶えず緊張関係があります。この二つの中心は決して融合しない。緊張関係が保持されます。保持されたままで存在する。いわば、二つの中心を保持しながら、調和が保たれるということです。

1) 中心が一つではなく二つ

もう少し言い換えますと、中心が一つではなく二つ。旧約聖書においては、宗教性と世俗性が二つの中心として楕円形的な思考圏を形成します。旧約聖書の中心である契約にそれが見られました。また、知恵文学でも「神を畏れることは知恵の初め」という共通主題においてこれが見られた。宗教性と世俗性が互いに緊張関係にある二つの中心であり、両者が融合することはない。どちらか一方が他方に吸収されるということもない。常に両者の緊張関係において存立し、思考される。

このような楕円形的思考ということが、旧約聖書の思考圏をよく説明してくれます。宗教性と世俗性という問題だけではないのです。旧約聖書には相反する神学や思想が併存しています。それが旧約聖書を分かりにくくしているのは確かです。例えば旧約聖書には偏狭な民族主義があります。つまりイスラエル選民思想です。これは、シナイ契約がそうになっているわけですが、イスラエル民族だけが神の祝福を受け、他の民族は祝福から除外される。この排他的な民族主義が旧約聖書の中心にあるのは確かです。それに対して、旧約聖書には民族主義を否定する普遍的な救済を説く思想もまた存在します。

例えば、預言者の思想にそれが色濃く反映されています。イザヤ書 19 章には、イスラエルの敵であるエジプト、そしてアッシリアがまず救済される、3 番目にイスラエルの民が救済されるという預言があるのです。これは面白いですね。

それからヨナ書には、イスラエルの敵であるアッシリアを救済するという神の意志が表明されています。ヨナはそれを受け入れたくないわけですが、アッシリアが神によって救われる。これは神の意志だと書いてあります。

ダビデの子孫がイスラエルの王国を永遠に支配するというメシア思想があります。そのダビデの血筋にはイスラエ

ル民族以外の外国人も関与しています。これはよく知られています。ルツ記のルツがそうです。ダビデの系図にモアブ人女性が関与しています。民族主義から考えるとあり得ない寛容な普遍的民族主義というものが、旧約聖書の中にあちらこちらにあるのです。これも一つの中心として説明することが可能です。二つの中心の間に緊張関係があって、楕円形的な思考圏を形成している。これによって、新約聖書のイエス・キリストの到来の伏線が説明されるのです。

旧約聖書の中心は律法ですけれども、その中心的思想は申命記主義神学で、律法を徹底して守る倫理的な規範です。ある意味で排他的な民族主義につながるものです。それに対して、律法にはもう一つ、祭司的な神学もあります。こちらは祭儀的な救済、宗教的な規範であって、申命記主義的思考と相違するものです。両者は全く区別されません。これら二つの中心が楕円形的思考圏を律法において形成している。これが律法だと説明できるのです。複雑な議論になりますけれども、このように対立するものがそれぞれに中心を形成して、楕円形的思考圏を形成している。これが旧約聖書なのだと言うことができます。

2) 単純に一元化しない。神頼みでもなく、ヒロイズムでもない。

要するに、単純に一元化しないのです。旧約聖書は楕円形的思考で構成されている。これを ambivalent (アンビバレント) という言葉で表現することも可能です。アンビバレントは両面価値性と言えますし、両義性、曖昧性、揺れ、などと言うことができます。このアンビバレントが旧約聖書の思想の複雑さを説明します。しかし、私はむしろ楕円形的思考圏と呼ぶほうが事柄をもっときちんと説明し得ると考えます。

楕円ですから中心が二つある。両方の中心の間に常に緊張関係があって、両者は融合しない。それは、単純に一元化はできないのだということです。どちらかに一元化しない思考だということです。つまり宗教性と世俗性の二元性において、旧約聖書は神頼みの信仰の書でもなければ、人間の自己責任で全てを処理できるヒロイズムの書でもない。徹底して宗教的であり、また徹底して現世的である。神に祈り、神に御心を問うけれども、徹底的に自分で考え抜き、努力を尽す。破局を生き抜いた民がたどり着いた思考がこれなのです。こういう生き方、在り方を教えてくれるのが旧約聖書なのです。

時間が過ぎてしまったのですけれども、最後にもう少しまとめの言葉を加えて終わりにしたいと思います。

旧約聖書の話だけをしてきましたが、現代との関わりを一緒に考えたいと思います。旧約の知恵は現代において何を語るか。

5. 楕円的思考と現代

西洋文明の源流としての旧約聖書という主題でここまで述べました。「生きるための知恵」という副題に寄せて、楕円形的思考と現代について考え、締めくりたいと思います。

1) 今をどう生きるか

今をどう生きるか。旧約聖書は古典文学です。二千数百年前に書かれた古代の文書ですが、それが本日に至る西洋の歴史、文化、宗教、思想・思考に反映しています。「神は愛である」という崇高な言葉で愛の理想についても語ることができますが、ここでは旧約聖書の知恵文学に寄せて考えてみます。

知恵文学では「神を畏れることは知恵の初め」という主題があって、それが箴言、ヨブ記、コヘレトの言葉において展開されていると書きました。しかし、知恵文学の知恵とは本来、どう生きるかを教える知恵です。どう生きるかを教える知恵。絶望をどう生きるか、生き抜くか。絶望と言いましたけれども、苦難、孤独、死という絶望をどう生きるか、これを教えるのが旧約の知恵です。知恵文学は何を今、我々に教えてくれるだろうか。

コロナ禍が続き、また、ウクライナ戦争終結が少しも見えてきません。先行き不透明です。ヨブ記の知恵が示唆を与えてくれるように思います。それは、ヨブ記が「神頼み」と「自己責任」という相反する楕円形的思考で考え抜かれているからです。先ほど「問いのコペルニクス的転換」ということを書きました。絶望的な破局の前で呆然とし、なぜ神はこのようなことをなさるのか。なぜこういう悲惨を神はこの時代に与えたのか。しかしこのように問うのではなくて、むしろ神から問われているのだから全力で戦いの終結と再建に取り組み、責任を果たさなければならないと考える。これが要するにヨブ記の結論なのです。「問いのコペルニクス的転換」ということです。問いは宗教的ですが、答えは現世的です。ヨブ記の知恵の思考がここにある。

コヘレトにおいても同じことが言えます。「神には時がある。時というのは誰も知り得ない。神には時があるけれども、誰もそれを知り得ない」。対立的思考で考えており

ます。言い換えると、終末的な最悪のシナリオを考え、それを阻むために建設的悲観論を構築する。また、このようにも言えるかもしれません。「明日が終わりであっても、今日、明日に向かって全力で種をまく」という思考です。これがコヘレトです。

今日種をまいても、明日芽が出るわけではありません。収穫は次の世代になります。それでも、決して絶望しない。建設的に考える。建設的悲観論がコヘレトの思考、知恵なのです。これも楕円の思考圏でのコヘレトの結論、メッセージだと言ってよいと思います。

2) コロナ禍の中で

コロナ禍という100年に一度の歴史的パンデミックに、私たち現代文明が直面しています。疫病は旧約聖書の時代にもしばしばありました。旧約では神による裁きの成就として、飢饉と疫病と敵に追われるという事態があります。これは避けられない現実、絶望的状况であった。疫病というのは感染症です。天然痘やペストであったかもしれませんが。感染症は神の裁きとして恐れられていました。でも、旧約では、疫病は神による災いである限り、契約観念に基づいて思考されます。つまり、疫病からの解放もまた神が計画していると考えられるのです。だから、疫病を恐れるだけでなく、そこから何かを学び、また前向きに生きようと考える。

このような疫病に対する姿勢が1,000年に及ぶ旧約聖書編纂の歴史に読み取れるのです。「主はこの国のために祈りに応えられ、イスラエルを襲った疫病はやんだ」。こういう記述が旧約にあるわけです。これも示唆的ですね。

そして最後、戦争と平和について考えてみます。

3) 戦争と平和

ウクライナ戦争によって、21世紀もまた戦争の時代になってしまったかのようです。戦争と平和について旧約聖書はどう考えるか。旧約の知恵は何を語るか。

旧約では戦乱が現実でした。戦争がなくなるということはほとんどなかった。にも関わらず、旧約聖書には「シャローム」という思想があって、シャロームが希求されます。旧約聖書の「シャローム」は「平和」と訳されますけれども、「シャローム」はただ単に戦争がないという状況ではありません。安全・調和・秩序・補い・幸せ・健康・挨拶、(これは「おはよう」とか「こんにちは」)、様々な意味がこのシャロームにはあります。

シャロームの語源シャラムは秩序を回復する、バランス

を保つ・補う・賠償するということを意味します。バランスが保たれるのですから、敵対関係があっても、その中で調和が保たれている状態がシャロームということになります。イエスが自らを犠牲にして十字架で自分の罪を贖(あがな)った、血を流して罪を贖った、これもシャロームをもたらすための犠牲です。このシャロームは、バランス感覚を保つという意味において、敵と味方という二つの中心を包み込んだ楕円の思考と説明できます。両者の間に均衡が保たれていることがシャロームだからです。このシャロームを実現するのが知恵です。旧約の叡智です。旧約では永久平和としてのシャローム、スローガン、理想が希求されます。しかし、現実において均衡を保つという仕方をもってシャロームを実現する。こういう現実主義的な平和観がまた思考されているのです。

あらゆることが閉塞し、膠着し、先が見えない現在においてどう生きるか。絶望的状况をどう生きるか、どう生き抜くか。旧約聖書の知恵的思考が示唆を与えてくれるのではないかと思います。このような旧約聖書の知恵的思考が西洋文明の源泉にあるのだということを、皆さんに知っていただきたいと思います。

以上、大急ぎで語りまして、1時間過ぎてしまったのですけれども、これももちまして私の講演を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

小菅(司会) 小友先生、どうもありがとうございました。

それでは、これからディスカッションの時間に入りたいと思います。ご発言いただく前に、学生の方は学部、学年、所属、そしてお名前を述べてからご質問ください。幾つか質問があるかもしれませんが、一つずつ質問してください。小友先生は牧師でありますけれども、これはもちろん宗教的な集会ではございませんので、どんなことでも率直に考えて、質問をしていただければと思います。どなたからでも、いかがでしょうか。お願いします。

小友 どんな質問でも結構です。私も答えられない質問があるかもしれませんが、一生懸命答えますので、何でも質問してください。

発言者A お話ありがとうございました。理工学部の教員でAと申します。二つ似たような質問があります。一つ目ですが、二つとも果たして楕円ができているのかどうか

ちょっと疑問に思うので、似たような質問になりますが、十戒の中で世俗的な命令と宗教的な命令が接続している、この二つが繋がっているというお話がありました。

例えば「神を愛しなさい」という宗教的な命令と「隣人を愛しなさい」という世俗的なもの。これが結びついて、切り離せないというお話だったのですけれども、なぜそれが結びついて切り離せないと言えるのかというのが分からなかったので、この結びつきをどう考えてらっしゃるのかというのが一つ目の質問です。これは単に2種類の異なる命令が並んでいるだけにも見えるのです。

小友 まず十戒について、十の戒めは出エジプト記の20章にあり、申命記にもありますけれども、2枚の石の板に刻まれたと書いてあります。2枚の石の板は2枚ですから、1枚目はどこまで、2枚目はどこからか、それが分からない。内容的には十戒は、前半は神との関係です。神との関係での戒め、掟なのです。しかし、後半は隣人との関係についての戒めなのです。両者がつながっているのです。

神が「私のほかに何者も神としてはならない」という、第1戒から始まります。その十の戒めの後半では、「汝の父母を敬え」が5番目の戒めなのですが、その5番目の戒め以降は倫理的な戒めです。つまり、神との関係についての宗教的な戒めと、人間関係における倫理的な戒め、これが接続しているのです。これが十戒なのです。

両者がなぜつながっているかというご質問だと思うのですが、なぜかと問うことはできない。なぜか分からないけどつながっているのです。別々にしてくれてもいいのにつながっているのです。つまり、旧約聖書の思考圏においてつながっているのです。不思議さがあります。

我々は、宗教に関する事柄と、世俗に関する事柄は、全く違うものとして区別しますが、これは十戒においてつながっているのです。それを戒めとして守るという契約がされるわけです。

私の説明でどれくらい答えているか分かりませんが、まずそういうふうにお答えをしたいと思います。

発言者 A ありがとうございます。

もしかしたら何かもっと内在的なつながりとか、両方がそろわないと成立しないような理由があるのかなと、ちょっと想像してみたのですがすけれども。

小友 論理的に考えれば、両者は別なのですよね。ただ、聖書ではつながる。面白いことに、5番目の戒めで「父と

母を敬え」という「敬う」という言葉が、旧約では神を「敬う」という仕方です。つまり「父と母を敬え」というのは倫理的な戒めなのだけれども、神を崇めるように尊敬せよという意味であって、「父と母を敬え」とは倫理的な戒めではなくて、むしろ宗教的な神との関係において守るべきものだと説明することが可能なのです。すごく神学的な思考になりますけれども。

とにかく旧約の世界では、神関係と人間関係の事柄が十戒においてはつながっているのです。これが十戒だけではなくて知恵においてもつながっているということ、本日皆さんにお話をしたわけです。

私の説明はあまりうまくないかもしれませんが、以上説明させていただきました。

発言者 A どうもありがとうございました。

少し似ているかなと後から思ったのですが、もう一つ疑問に思った部分があります。それが知恵の話で「神を畏れることは知恵の初め」だという言葉なのですが、ご説明を聞いてみると、ここまでは人間の知恵、ここから先は人間の知恵では到達できない神が決める部分、みたいな例が挙がっていたと思います。すると「知恵の初め」と言えるのかなと疑問に思いました。「終わり」と言っては元も子もないかもしれません。神を畏れると、もうそこは「知恵は終わりだ」と。ある意味、知恵を諦めるときに神に頼るといような形になってしまっただけかと思いました。

小友 確かにそうですね。神を畏れること、それは知恵の終わりであると言った方がよくわかります。ただ、これも契約的な表現なのだとしたらいいのでしょうか。「神を畏れることは知恵の終わりである」となってしまうと知恵は意味がないのだとなってしまうと、それによって私は一元化されてしまうような印象を持つのです。そこを「初めである」と言うことにおいて、人間の知恵の有効性ということが、つまり、神を畏れるということに融合しないことが説明し得るのかなと、私は考えます。とにかく面白いことに、「神を畏れることは知恵の初め」であると聖書には書かれている。

もう一つ言えることは、「神を畏れることは知恵の初め」において、この知恵は、ただ単に人間の知恵というだけではなく、ヨブ記の言葉にもありますように、「神の知恵」という意味も含んでいるかなという気がするのです。「神を畏れることは知恵の始め」という格言が箴言の中心にあって、箴言では何度も繰り返されるし、ヨブ記でも、そ

してコヘレトでも、これが繰り返されるのです。

言わんとしていることは分かります。何で「知恵の終わり」ではなく「知恵の初め」なのか。その発想は私も分かります。しかし、聖書では「神を畏れることは知恵の初め」と書いてあるのですね。

堂々めぐりの説明で、答えになっていないかもしれませんが、以上が私のコメントです。

発言者 A ありがとうございます。

小菅 (司会) ありがとうございます。この中にも専門家がいらっしゃると思いますので、例えば私が代わって答えようみたいな、それでも結構でございます。ほかにご質問いかがでしょうか。お願いします。

発言者 B 理工学部3年のBと申します。

旧約聖書の中心的思想は申命記主義的神学、律法を守る倫理的規範と書いてあることに関しての質問なのですが、それともう一つ、祭司的神学というものも挙げられています。律法を守ると聞いたときにぱっと思い浮かんだのが、新約聖書のパリサイ派なのですが、もしこの律法を守る倫理的規範を新約聖書時代に遵守している人々がパリサイ派だったとして、祭司的神学というものを新約聖書の時代に復元しているのは誰なのでしょう。サドカイ派ということになるのかなと、ちょっと疑問に感じました。

小友 興味深い質問です。確かに言うとおおり、紀元1世紀に、つまりイエス・キリストの時代にユダヤ教には三つのグループがありました。その一つはファリサイ派（パリサイ派）なのです。もう一つはサドカイ派。三つ目がエッセネ派といいまして、実はクムランの共同体を形成していたグループです。しかし、聖書にはエッセネ派は出てきません。ファリサイ派とサドカイ派がユダヤ教の中心的なグループだったのです。イエス・キリストを十字架にかけたのは、ファリサイ派・サドカイ派など律法学者（祭司長）だと言いますが、ファリサイ派とサドカイ派は微妙に思想が違うのです。

サドカイ派は祭司的な思考をするグループです。神殿、祭儀を守る。神殿に依存して成立しているのがサドカイ派です。それに対してファリサイ派は律法、しかも書かれた律法だけではなくて、口伝の律法も信じるのです。サドカイ派は特に律法でもモーセ五書を信じる傾向が強い。ファリサイ派は律法のほかに口伝の律法も信じる。

面白いのは、ファリサイ派は天使を信じるのです。そして、復活も信じる。ところがサドカイ派はそれを信じない。ユダヤ教の中心的グループ、ファリサイ派、サドカイ派はそれくらい違うのです。ファリサイ派もサドカイ派もイエス・キリストを排除するわけですが。

話は戻りますけれども、旧約の律法、申命記主義的な思想と、それから祭司的な思想、これが二つの極にある中心だと、言いました。ある意味ではそうなのです。サドカイ派は祭司的、それに対して、ファリサイ派は申命記主義的と言えるかもしれません。ファリサイ派もサドカイ派もお互いに違うのだけれども、イエス・キリストを十字架に追いやるユダヤ教の中心的グループとして新約聖書には登場してきます。ちなみに神殿崩壊によってサドカイ派は消えていきました。ファリサイ派だけが残るのです。

こういう説明で分かりましたか。

発言者 B はい。大丈夫です。ありがとうございます。

小菅 (司会) ほかにいかがでしょうか。どなたかお願いします。

発言者 C 経済学部2年のCです。

コヘレトの言葉とヨブ記についてお聞きしたいことがあります。コヘレトの言葉もヨブ記も非常に美しいというか、すごく素晴らしいことを言っているとは思っています。けれども、なぜか最後のところで、コヘレトにしてもヨブにしても、苦難をいろいろ抱え込んだ上でその苦難を最後、神に還元してしまうところが、どうしても違和感があります。分からないことというのを、分からないからこそ、人智に及ばないものの背後には神がいるという論理になっているような気がするのです。分からないことは分からないというところで完結させるべきなのではないかなという気がしてまして、神というものをわざわざ概念として持ち出さなくても、美しいキリスト的な生き方ができると思うのです。

小友 なるほど。いい質問ですね。

旧約では、神は存在するか、しないかという問いは立てないのです。神は存在するのです。神によって自分たちはイスラエル共同体に属している。それがイスラエルのアイデンティティなのです。このアイデンティティが先にありますから、そこにおいて神は存在するか、否かという問いは意味がないのです。

今現在生きる我々にとっては、そういうイスラエルの契約は全然意味がありません。ですから、今あなたがおっしゃったように、神という概念を使わなくていいのではないかと。そうですよ。我々には、そういうふうに理解していいのです。

旧約の知恵は、時空を超えて我々に向かって語りかけています。我々は契約共同体に縛られない存在なのです。イスラエルのことを知らない、契約も知らない、そういう現代人である我々に向かって旧約の知恵が語りかけている、呼びかけているのです。

あなたのように考えていいのです。神が存在するか、しないかわからない。神について考えないで、とにかく全力でやるしかないのだと考えたっていいのです。

もう一つ、このことについて神の沈黙ということが問題となります。神が沈黙している。神の沈黙というのは、神を信じるから神の沈黙と言うのです。神を信じない者にとっては、神の沈黙なんて意味がありません。神なき時代、神なき現実の中でどう生きるかということを考える。けれども何も神という超越的概念を使わなくたって説明できるではないか。私は同じことだと思うのです。ちょっと回りくどい言い方になりましたけれども、ヨブ記においてもコヘレトにおいても、神はまさに沈黙して答えないのです。

発言者 C そうしますと、現代におけるキリスト教というのは、どういう意味を持つことになるのですかね。

小友 キリスト教ですか。

発言者 C はい。キリスト教は……。

小友 ユダヤ教的な言葉でもって表現しましたがけれど、キリスト教では救済の主はイエス・キリストなのです。イエス・キリストによって罪赦されて、イエス・キリストによって命を与えられて、今、生かされている。そのイエス・キリストにおいて、キリスト教は神を理解する。しかしキリスト教においても神の沈黙がある。キリストは目に見えないけれど、しかし共にいると信じるのです。

ボンヘッファーという牧師がいました。ボンヘッファーが晩年、獄中書簡の中で「我々は神の前で、神と共に神なしに生きる」と言うのです。ボンヘッファーという人は、神を信じないわけがないのです。しかし、いま自分はヒトラーの暗殺計画に加担して、捕らえられ、獄中にいて、死はもう決定している。そこにおいて、神の介入をもうボン

ヘッファーは考えないのです。神が介入して自分を助けしてくれるなんて考えない。けれども、ボンヘッファーは神を信じるのです。イエス・キリストを信じるのです。その信仰の言葉を「私は神の前で、神と共に神なしに生きる」と言うのです。これは一見矛盾です。神は沈黙している。しかし、その中で私は神の前で神と共に生きるのだと。神なしでも神の前に生きるのだと。これは極限的なキリスト教の思考、考え方と言っているいいかもしれません。イエス・キリストは見えない。しかし、共にいるのだ。こういう信仰観と言っているいいでしょうか。

キリスト教はユダヤ教からキリスト信仰に移行します。そこにおいて、ユダヤ教の神認識とキリスト教の神認識は、同じ神です。けれども、自分の罪がキリストに贖われ、キリストが自分の救い主だという感覚は、ユダヤ教にはないのです。しかし、おぼろげながらですが、ヨブ記においても、神の救済においてイエス・キリストの方を見ていると言ってよい。それをはっきり見ているのがキリスト教だと思います。

発言者 C ありがとうございます。

小菅 (司会) どなたかほかにかがでしょうか。お願いします。

発言者 D 理工学部3年のDです。

楕円という話からなのですけど、楕円というと二つの中心から僕たちがその楕円の円周上にいるようなイメージが僕にはあります。そうなると、世俗という点と宗教という点からの距離の合計は常に等しいわけで、世俗的に考えれば考えるほど神からの距離が遠くなって行って、逆に神に近づけば近づくほど世俗からの距離が遠くなっていくような気がします。限界まで考えて、残りを知恵が限界まで考えた後に神があるというのでも、世俗と宗教を同時に近づけることはできるのかということを考えました。

小友 私は旧約の世界を分かりやすく図式化して、二つの楕円形的な思考圏として説明することによって、旧約の世界が大体説明できるし、イメージできると考えて楕円の思考圏ということを書きました。

しかし、今、神を信じていない、またはユダヤ教でもキリスト教でもない人にとって、自分は、はたして楕円の思考圏のどこにいるのか。ひょっとして、周辺、あるいは楕円の思考圏の外にいるかもしれない。自分がどこにいるかという

ことが問われるのかなと思いました。確かにそうです。

旧約の思考圏というのは、神は存在することが疑われない世界なのです。人は契約共同体の一員です。だからさっき言ったように、神が存在するか、しないかということを問わない。なぜ神は存在しないのですかという問いは成り立たないのです。契約共同体の中の一員だからです。自分がイスラエルの民であるということは、そういうことなのです。その旧約の世界を私は楕円形的思考圏として説明しました。しかしこれは、今、ユダヤ教もキリスト教も関係ないという私たちにとっては当てはまらないかもしれない。

けれども、旧約の知恵はこういう旧約の世界を超えて、我々に対して語りかけているのだと思う。ここから何か学んで、そしてここから生きる力を得よ、絶望を生き抜けと語りかけられているのではないかと思うのです。

楕円の思考圏ということがピンと来なくても、それが自分と縁遠いように見えても、この旧約の知恵が語る、絶望を生き抜いた知者の言葉が、今の私、私たちにとってどういう意味があるか。今、行き詰っている自分の中で何かヒントを語っているのではないかと問い直す。そのように考えていただければありがたいなと思いました。

私は楕円の思考圏で皆さん考えろと言っているわけではありません。旧約を理解する場合には、こういうふうにと考えるとわかりやすいということで、このような説明をしたのです。大事なことは絶望の中でどう生き抜くか。その知恵を旧約から、知恵文学からヒントを得るとのことだと思います。

発言者 D ありがとうございます。

小菅 (司会) ほかにいかがでしょうか。

発言者 E お話ありがとうございました。医学部教員の E と申します。

冒頭に小菅先生が「宗教を知らな過ぎる」とおっしゃったのですが、非常に耳の痛いお話で、本日はとてもよいお話が伺えたと思っております。

最初少し感想を述べたいのですが、私もどちらかというところ理系なので、自然界的な思考が4割、人間界的な思考が6割ぐらいでふだん生きておると思っております、それとこの世界観みたいなものはすごく近いなと感じました。

物理学でも、例えば宇宙の創成の話をするのですけれど、「宇宙の始まりの前はどうなっているのだ」というの

は、それはもう「神様がつくった」というようなことになってしまっているの、その話とも非常に合っていると感じました。

クラシック音楽でクロード・ドビュッシーという作曲家が作曲した、正式な名称が定かでないのですが、弦楽とハープのための音楽という曲があります。神聖な音楽と世俗的な音楽という二つの曲があって、もしかしたらこれはこのキリスト教を意識してドビュッシーが作曲したのかなというの、すごく感じたところです。

冒頭の A 先生のご質問も、私はもちろん専門家でも何でもないのですが、ちょっと考えたのが、つながりがあるとするのはキリスト教上のある意味定義みたいなところだと考えると、それが直接宗教的で、それについての理由づけを考えるとというのが、ある意味世俗的な行為なのかなと思って。そうすると見事にそれも楕円の思考になっているというのを感じました。

ご質問なのですが、宗教全体に言えると思うのですが、どちらかという日本はあまり宗教が根づいていなくて、冠婚葬祭はありますけれども、積極的に宗教を意識していない人間が多分多いと思うのです。欧米だと主流はキリスト教だったりすると思うのです。そういう西洋の、日本は含めない、個人主義的な生き方が一般的な国で一つの対象を信仰するような宗教が普及して、日本のようにある意味、同調主義というか、「おててつないで一緒に歩きましょう」みたいな国が逆に一つの信仰をするような宗教が普及していないというのは、何か逆のように思えます。もし先生のお考えがあったらお願いします。

小友 まず、二千数百年前の旧約の世界において、いわゆる科学という発想はなく、自然科学という学問分野があるわけではないのです。

けれども、旧約の知恵は、要するにこの世界の法則を見いだすための思考なのです。法則を見つける。この世界には宇宙を成り立たせる法則がある。また、人間世界にも法則がある。その法則を見いだすことが知恵なのです。だから箴言でも、こうこうすれば出世するとか、豊かになるとか。これは人間世界における法則の探求なのです。法則を見つけるのです。

「神を信じる者は長生きして、神を信じない者は早死にする」という格言があります。面白いですね。なぜ神を信じる者が長生きして、神を信じない者が早死にするか。しかし、そういう法則を見つけたわけでは。ちょっと話が脱線してしまうかもしれませんが、恐らく神を信じる人

は、神から造られた自分の体だから不衛生なものを食べず衛生的に生活するから長生きをする。神を信じない人はそんなこと考えない。健康的な生活習慣をしないから結局、健康を損ない早死にすることなのかもしれません。とにかく人間世界に法則を見つける。それが箴言の格言を生み出したのです。

この世界にもこの宇宙においてもやはり法則がある。その法則を探し出す。徹底的に探究するわけです。これは自然科学に通じます。旧約の知恵は自然科学も含んでいるのです。徹底的に考え、この世の法則を考える。しかし、法則を見つけても、アインシュタインみたいに物理学における法則を見つけたとしても、そこにはやはり限界がある。その先は分からない。科学でいかにということはわかっても、なぜということは説明できません。そこで知の限界で神を知り、神の支配に気付かされるという発想です。現代自然科学でも同じことが言えると私は思うのです。

だからと言ったら変ですけども、ヨーロッパでは自然科学者の中に結構、敬虔なクリスチャンがいるのです。どれくらいかは分からないですけど。要するに、宗教性と世俗性、現世性といましようか、あるいは自律性といましようか、両者が矛盾せずつながるのです。そういうことが、面白いことだと私は思っています。

現代における宗教、特に日本における宗教の問題があります。本日申し上げました旧約は、共同体が決定的です。個人ではない。だから、個人の信仰より共同体の信仰。イスラエルの民の一員だという共同体意識がある。キリスト教もそうなのです。教会共同体、信仰共同体に属するということが、キリスト教の信仰です。だから教会を抜きにして信仰はない。「私は聖書を読んで、神を信じます」は個人的な信仰であって、新約聖書でいうところの教会の信仰ではないのです。

要するに、信仰が非常に個人主義化している。それが現代の傾向ではないかなと思います。でも、個人主義化している信仰も、聖書においてはちゃんと意味づけられていると思います。自分は教会も、キリスト教も信じない。けれども、聖書を読んで神の存在を信じるという気持ちは尊いものだと私は思っています。

日本の宗教観というと、先日、小菅先生と話をしたのですけれど、私の印象ですが、1990年代のオウム真理教以来、宗教は怖いという先入観が強くなりました。宗教的な心情は尊いけれども宗教は怖い。宗教団体は怖い。深入りしないほうがいい。素朴に聖書を読んで信じるぐらいにしておいたほうがいい。宗教に対してそういうイメージが強

くなったのが1990年代以降だと思います。

現在においても宗教的な感情は尊いけれども、宗教団体としての宗教に対して違和感といったらいいか、嫌悪するという考え方が根強いのかなという気はします。

安倍元首相が殺害された事件についても、背後にカルト的なキリスト教宗教団体があって、今後どんなふう報道されていくか分かりませんが、個人主義的な宗教感情は一応尊重されても、深入りして宗教団体に所属すると恐ろしいことになる。宗教団体は危険だというふうな宗教観にどんどんなっていくのではないかなと、私は危惧しています。

ちょっと私の感想を含めてしまいましたけれども、以上です。

小菅(司会) ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。お願いします。

発言者B 理工学部3年のBです。

イスラエル民族はもともと一つの民族ではなかったということは、エジプトから脱出したという話だったので、アブラハムもいなかったということになってしまうと思うのです。もしそうだとするならば、エジプト以前の例えばアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフと来たこの物語にはどういう意味があったのですか。

小友 これはすごく聖書学的な問題に触れています。聖書学的な思考でもって本日のお話をしましたけれども、聖書学ではイスラエルの起源は出エジプトなのです。でも、聖書を素朴に読むと、創世記に天地創造からの創造物語があって、創世記12章からアブラハムの族長物語が始まります。アブラハム、イサク、ヤコブと族長が続いて、そしてヤコブの息子のヨセフがエジプトに売られ、エジプトで宰相、大臣になって、ヨセフの下にヤコブの家族がみんな飢饉から逃れてやって来る。そのヤコブの家族が、つまりイスラエルが、やがてエジプトの国で奴隷の民となっていく。この民をモーセが遣わされて導き出す。そういうふうに書かれてあります。そうすると、イスラエルの起源は、出エジプトのはるか以前であって、出エジプトだと考えるのはおかしいのではないかな。それは確かにそうなのです。

でも、聖書は面白いですね。創世記の物語の記述よりも、出エジプト記の記述のほうが実は古いのです。聖書学ではそう考えるのです。もともと出エジプトが先にあったのです。そして、そこからイスラエルの民が形成されて、とりわけ王国時代以降に聖書の物語が記されるわけです。

先ほど私も言いました創世記の最初の第1章、天地創造物語は、聖書学的に説明すると捕囚の時代の話なのです。出エジプトのずっと後です。全てを失ったイスラエルの民が、なぜ自分たちがこうなったのか、自分たちに救いはあるのか、神はどのように導いてくださろうとしているのかを考えたとき、歴史の編纂が始まったのです。その歴史の一番最初の記述に「神が光あれと言われた。光があった」とあるのは天地創造を歴史的に記述したのではないのです。捕囚の時代のイスラエルの民の現実の中で、神が自分たちに希望を与えてくれたという体験に由来する物語なのです。そう考えると創世記の創造物語も、アブラハム、イサク、ヤコブの物語も、実は出エジプトから始まるイスラエルの歴史の後に書かれているということが説明されます。

素朴に聖書を読むと、出エジプトの前にアブラハム、イサク、ヤコブが登場しますが、事柄の順序からいうとその逆なのです。出エジプトから始まる起源、そこにイスラエルの根源があった。そのように考えたほうが説明しやすいし、事柄としても事実在即している。聖書学ではそう考えます。

発言者 B もう1点あります。ユダヤ人と同様にアラブ人も、アブラハムの息子のイシュマエルを起源としているという、そういう伝統的な考え方だと思うのですが、アラブ人の起源はどこにあるのでしょうか。

小友 アラブ人、イスラムの人たちはコーラン、クルアーンを大事にします。でも、クルアーンのほかに旧約聖書も大事にするのです。新約聖書ももちろん尊重します。旧約聖書にアブラハムの息子としてイサク、イシュマエルがいます。最初にイシュマエルがアブラハムとハガルの間に生まれますけど、イシュマエルは旧約聖書を読んでも分かります。アラブ人の祖先なのです。イサクが嫡子であって、これが正統なアブラハムの後継者、ユダヤ人の祖になるわけです。アラブ系の民族にとってはイシュマエルが先祖なのです。イシュマエルの父親はアブラハムです。ということは、イスラム教徒もアブラハムにさかのぼる。ユダヤ人もユダヤ教もアブラハムにさかのぼるのです。また、ユダヤ教から派生したキリスト教も、アブラハムが信仰の父でしょう。この三つの宗教を「アブラハム宗教」と呼ぶこともあります。アブラハムが祖なのです。

そういうわけで、アラブ人はイシュマエルが祖。そう考えるとパレスチナの闘争、イスラエルとパレスチナの人たちの確執も、さかのぼるとイサクとイシュマエルに行き着

きます。さらにまた、お父さんはアブラハムですから本当に近いのですよね。旧約聖書で考えると非常にお互いに近い民族だということが説明できるし、また近いゆえに対立するのだということです。よろしいでしょうか。

発言者 B ユダヤ人の起源は旧約聖書に基づくアブラハムになっていますが、実際はエジプトの下級の市民だったというお話だったと思うのですね。そうすると、もしアブラハムという者が存在しないとすると、アラブ人の起源についても考え直さないといけないことになると思うのですが、それは分かっているのですか。

小友 聖書学は聖書考古学の知見も非常に大事なのですよね。考古学的に考えると、これは要するに歴史的に考えるということですが、出エジプトの出来事は恐らく紀元前13世紀、紀元前1200年頃です。

族長の時代、アブラハム、イサク、ヤコブの時代は出エジプトの前ですから、紀元前18世紀から15世紀にかけてとなります。紀元前18世紀から15世紀にかけてがアブラハム、イサク、ヤコブの時代であったと。そこに何らかの歴史的信憑性はあったとしても、少なくともその時代にアブラハムについてのきちんとした伝承があったとはまったく証明できないのです。

アブラハム、イサク、ヤコブの族長物語も後に書かれたのです。紀元前10世紀以降に書かれているのです。つまり過去の出来事を振り返って、それを書いているのです。これはうそを書いているということではありません。歴史的には証明できないということであって、うそを書いているということではない。

いずれにせよ、族長物語について書いてある事柄は大体、紀元前の10世紀以降の歴史からしか説明しようがないのです。例えばアブラハムがラクダに乗っていると、イサクがペリシテ人の王たちと交際しているとか、これは紀元前の18世紀から15世紀にはあり得ないです。ラクダの飼育は紀元前の11世紀以降だし、ペリシテ人がパレスチナにやって来るのもやはり紀元前11世紀以降なのです。紀元前の18世紀から15世紀の族長の時代にペリシテ人は存在しなかったし、ラクダもまだ飼育化されていなかったのです。

ですから、過去の出来事をさかのぼって現在のこととして書いている。そのように聖書学では説明します。要するに、出エジプト以降なのです。

発言者 B 結局アラブ人がどこから来たのかは、まだ分からないということでしょうか。

小友 アラブ人についても、確かに紀元前 18 世紀から 15 世紀のことは説明できないけれども、そこに書かれている系図において諸民族のつながりが分かるのです。ですから、アラブ系の民がイシュマエルにさかのぼる、つまりアブラハム、イサク、ヤコブのユダヤ系とは違うということは説明できます。民族表というのは、これも歴史的起源が問われます。けれども、民族表というのは必ずしも間違っていないだろうと言われていました。

発言者 B 分かりました。ありがとうございます。

小菅 (司会) 予定の時間を過ぎておりますのでそろそろ閉じたいと思いますが、もしどうしてもという方がいらっしゃれば…。よろしいですか。

先生、ご講演ありがとうございました。多分皆さんも本日のお話を聞いて、何かすごく分かったと、ああそうだと、いうのでは、恐らくはないのだと。そういうものではないかと思います。ただ、これは知るということが大事で、私たちは宗教に対して、それを信じる、信じないは別ですよ。けれども、いずれにしても関心を持つ。もしかしたらそこところが、現代のいろいろな諸問題を解決する、あるいはその問題を見つける一つの手掛かりになるかもしれないと考えるべきなのだと。そういう姿勢が教養ということだと思います。本日の小友先生のお話を手掛かりにして、これは小友先生に何か答えてもらうというよりも、我々自身が問いかけてられているという。まさに本日の言い方をすれば、答えを見つけなければいけない問題なのかもしれない。

小友 そのとおりですね。信じるかどうかではなくて、教養としてこの旧約聖書の知見をどう我々が生かし、またどのように問題を乗り越える手掛かりにするかということ、そこが大事だと思いますね。

皆さんなりに考えて、何か皆さんが絶望を乗り越えて生きる際に手掛かりが旧約、知恵文学に見つかれば、とてもうれしいことです。教養ということで旧約聖書を理解すること。その基本線は、私もたいせつなこととして支持したいと思います。

小菅 (司会) ありがとうございました。

最後に、実は本日の講演が実現したのは、会場にもいらっしやっている船戸良隆先生のご仲介によります。御礼を申し上げたいと思います。

それでは皆さん、アンケートにご協力ください。ぜひお答えいただければと思います。出席受付票もありますので、そちらもぜひよろしく願いいたします。

それでは皆さん、どうもありがとうございました。

小友先生、どうもありがとうございました。

小友 長時間ありがとうございました。

(拍手)

——了——